

「令和2年度富山市中学校1年生学力調査」
結果の概要について

富山市教育委員会

「令和2年度富山市中学校1年生学力調査」結果の概要について

I 本調査の目的

- 各中学校が、1学年生徒の入学時の学力定着状況を把握し、今後の学力向上に向けた学習指導に生かす。
- 生徒一人一人が自分の努力すべき課題に向かって、意欲的に学習に取り組む。
- 各小学校は、卒業生の調査結果を踏まえ、学習指導の改善・充実を図る。

II 実施状況

- 実施期日 令和2年6月18日(木)前後2日間
※このため、本調査の点数にかかわる数値は参考値とする。
- 調査教科 国語、社会、数学、理科
- 実施学校数・生徒数

実施学校数	生徒数	
27校 1分校 (附属中を含む)	在籍数	3,503人
	受検者数	3,412人 (4教科全てを受検した生徒数)

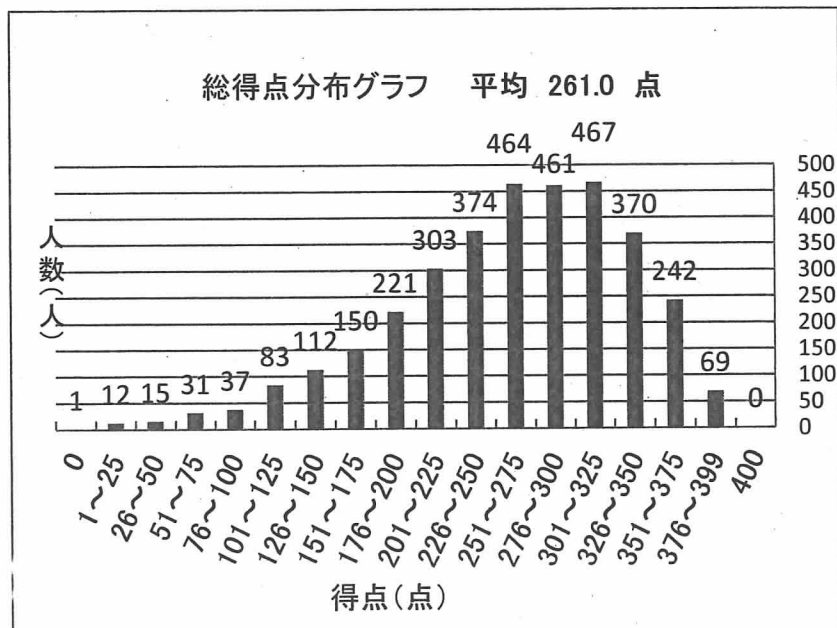
III 結果の概況(小数第2位で四捨五入してあるため、計が100%にならない場合がある。)

1 教科別全生徒平均点

国語	社会	数学	理科	4教科
61.8点	61.5点	66.0点	71.4点	261.0点

2 総得点分布表・グラフ

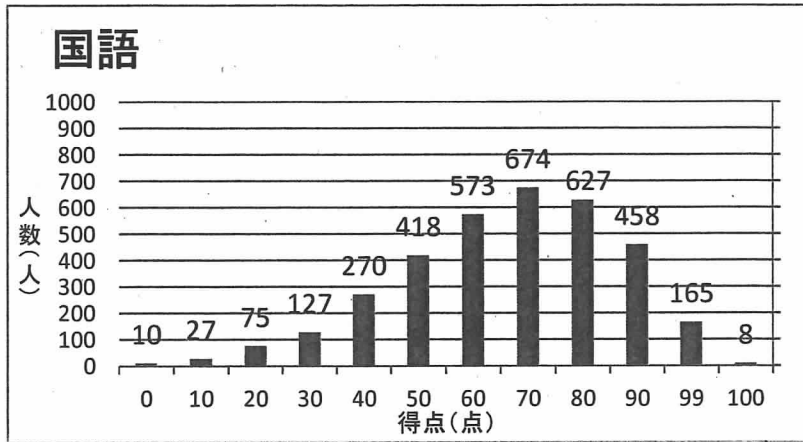
得点範囲	度数	%
400	0	0.0%
376~399	69	2.0%
351~375	242	7.1%
326~350	370	10.8%
301~325	467	13.7%
276~300	461	13.5%
251~275	464	13.6%
226~250	374	11.0%
201~225	303	8.9%
176~200	221	6.5%
151~175	150	4.4%
126~150	112	3.3%
101~125	83	2.4%
76~100	37	1.1%
51~75	31	0.9%
26~50	15	0.4%
1~25	12	0.4%
0	1	0.0%
計	3412	100.0%



3 教科別得点分布表・グラフ(参考値)

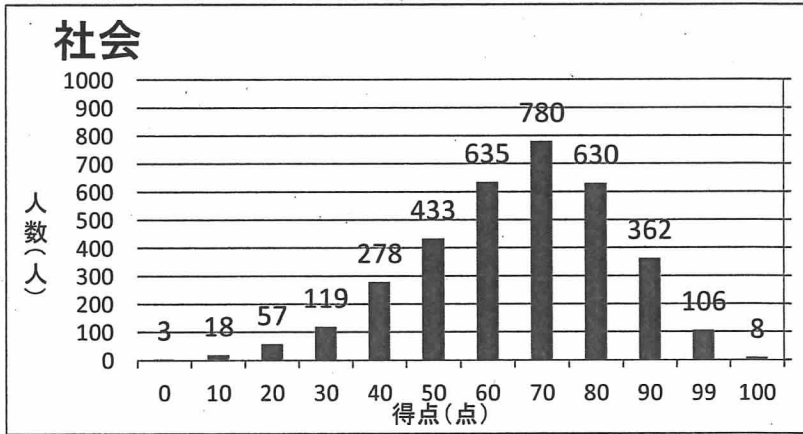
国語

得点範囲	度数	%
100	8	0.2%
91~99	165	4.8%
81~90	458	13.3%
71~80	627	18.3%
61~70	674	19.6%
51~60	573	16.7%
41~50	418	12.2%
31~40	270	7.9%
21~30	127	3.7%
11~20	75	2.2%
1~10	27	0.8%
0	10	0.3%
計	3432	100.0%



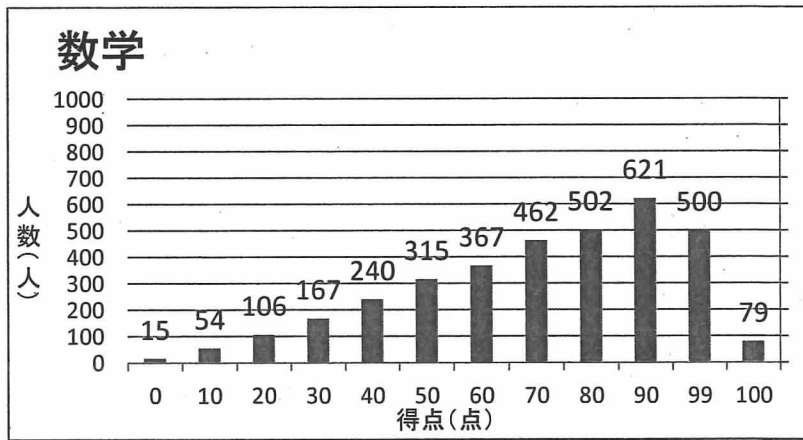
社会

得点範囲	度数	%
100	8	0.2%
91~99	106	3.1%
81~90	362	10.6%
71~80	630	18.4%
61~70	780	22.7%
51~60	635	18.5%
41~50	433	12.6%
31~40	278	8.1%
21~30	119	3.5%
11~20	57	1.7%
1~10	18	0.5%
0	3	0.1%
計	3429	100.0%



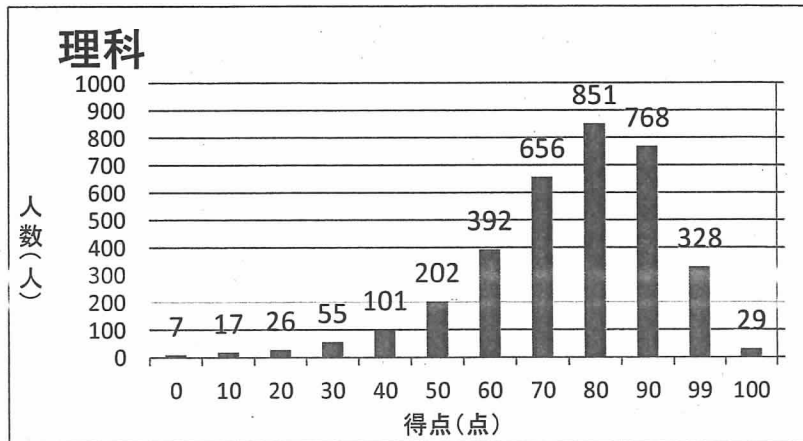
数学

得点範囲	度数	%
100	79	2.3%
91~99	500	14.6%
81~90	621	18.1%
71~80	502	14.6%
61~70	462	13.5%
51~60	367	10.7%
41~50	315	9.2%
31~40	240	7.0%
21~30	167	4.9%
11~20	106	3.1%
1~10	54	1.6%
0	15	0.4%
計	3428	100.0%



理科

得点範囲	度数	%
100	29	0.8%
91~99	328	9.6%
81~90	768	22.4%
71~80	851	24.8%
61~70	656	19.1%
51~60	392	11.4%
41~50	202	5.9%
31~40	101	2.9%
21~30	55	1.6%
11~20	26	0.8%
1~10	17	0.5%
0	7	0.2%
計	3432	100.0%



IV 結果の概要

1 抽出調査について

27中学校の各学級8人(男子4名、女子4名)をそれぞれ出席番号の早い順に1番から4番までを抽出生徒の記録としてデータを取る。欠席の場合は、出席番号を繰り上げて、必ず各クラスから8人の抽出を行うものとした。

2 抽出生徒数

学校数 学級数 抽出生徒数 27校 101学級 801人(附属中含む)

V 各教科の概要

1 教科の考察

(1) 教科全体から見た結果

「得点分布表」「観点別解答率表」等から読み取れる教科全体の概要について、その特徴を表記する。

(2) 正答率の高い問題について

「設問別正答率表・グラフ」から読み取れる、正答率の高い問題について、考察を行う。

(3) 読解力と正答率の関連について

「設問別正答率表・グラフ」から読み取れる、正答率と読解力との関連について、実際の問題の一部を提示しながら考察を行う。

(4) 全国学力・学習状況調査の類題について(国語・数学のみ)

「平成31年度(令和元年度)全国学力・学習状況調査 小学校」の類題を設定し、正答率を比較し、学習の状況の変容について考察する。

2 今後の指導

1の(3)で考察した読解力の視点も含め、今後の指導の工夫について表記する。

VI 読解力の視点からの考察

1 読解力

読解力とは、一般的には、例えば主語と述語の関係や、「それ」などの指示語が何を指しているのかなど、文章で表された情報を的確に理解する力である。また、「PISA型読解力」とは、一般的な文字や文章といった「連続型テキスト」の理解だけでなく、グラフや図表、地図など様々な資料(「非連続型テキスト」)を理解し、利用し、熟考する力であるとされている。

2 読解力の視点からみえる課題

国語科の調査において、文中の「主語」として適切なものを選択する出題があった。下の①が今年度の問題であり、②は昨年度4月に実施した問題である。

① あれは、/山田さんが/大切に/育てた/貴重な/花だ。 → (主語:「あれは」) 【正答率 29.3%】 R2 実施

② これは、/去年の/夏休みに/ぼくが/描いた/絵だ。 → (主語:「これは」) 【正答率 28.3%】 H31 実施

①は文中に修飾部がある複文のため、述語の「花だ」に近いことに加え、「が」が名詞についているという表面上の判断から「山田さんが」という語を主語と判断し選び、誤答となったことが予想される。2年間にわたり類似した問いに対する正答率がほぼ同程度にとどまっている。このことから、文中の主語・述語を形や位置にとらわれず、文章中の語句の役割を正しく捉えていくことが継続した課題だと考えられる。

また、社会科の調査のグラフから情報を読み取って答える問題において、通し番号49、50の正答率は合わせて87%の正答率であったのに対し、通し番号16は正答率が15.5%と差が大きい。この2つの問題を比較すると、通し番号16の問題は、グラフから読み取れる情報を目的に合わせて処理することに課題があったと考えられる。

3 読解力の向上に向けた今後の指導

・活字に触れる活動の充実

近年、主にLINE等のSNSを利用して連絡をとる機会が多い環境であり、主語・述語を省いた意思の伝え方に慣れているため正しい文章を書く機会が少なくなっている。したがって、国語科を中心として、語句の係り方などの基礎・基本の指導を丁寧にしながら、発達の段階に合わせて新聞を活用した授業を行ったり、辞書や辞典を積極的に活用したりするなど、生徒が活字に触れ、正しい文章を読んだり書いたりすることが必要である。

・グラフや図表の情報を処理する能力の育成

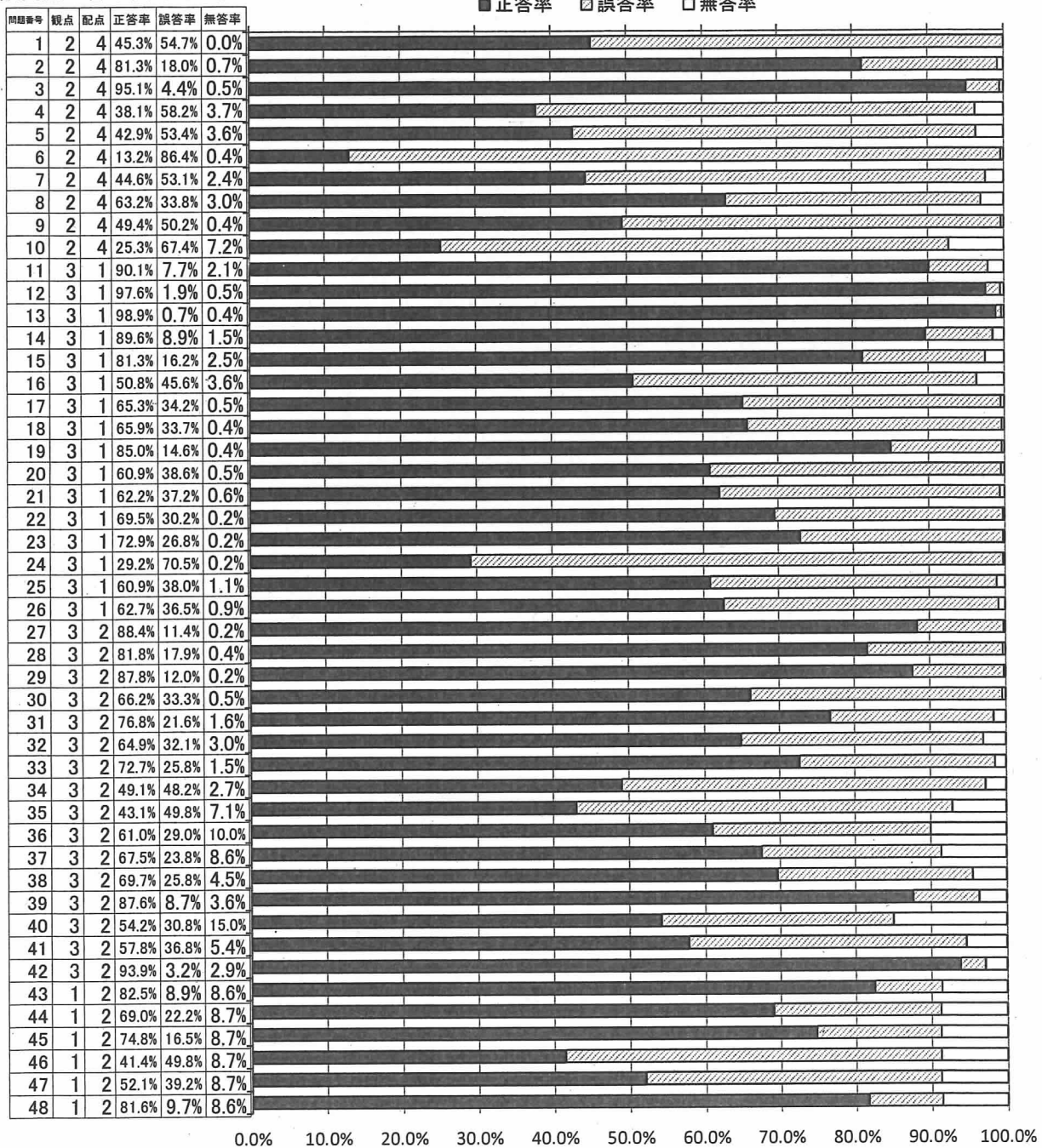
グラフから読み取った情報を目的に合わせて処理する力を養っていくためには、グラフや図表から読み取れる情報をあげ、その情報同士の関係を明らかにするなど、情報に関連づけて考える方法を習得するなどの手立てが重要となる。

Ⅶ 抽出生徒から分析する各教科の概要

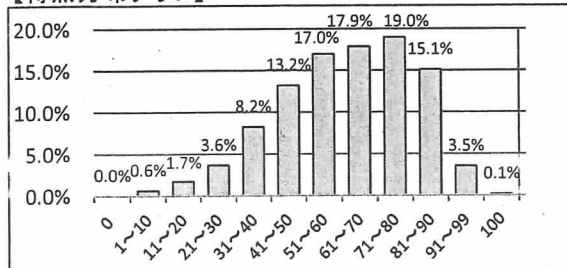
(小数第2位で四捨五入してあるため、正答率、誤答率、無答率の合計が100%にならない場合がある。)

国語 抽出生徒数 801人 抽出平均 61.8点

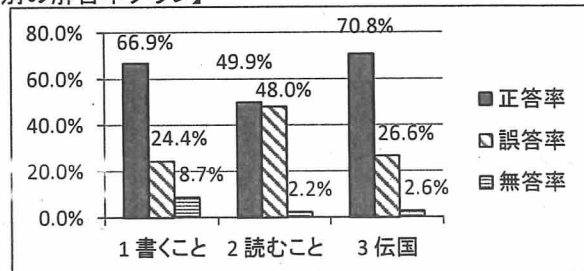
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



1 国語科の考察

(1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は61.8点である。観点別の平均正答率は、「書くこと(66.9%)」と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(70.8%)」に比べ、「読むこと(49.9%)」の低さが顕著であった。(「読むこと」については、昨年度より約9ポイントの低下が見られた。)無答率7%以上の問題は11問(問題数全体の22.9%)であり、昨年度の9問から増加している。

(2) 正答率の高い問題について

「読むこと」の中でも、説明的な文章では、テレビやラジオ等の事例の特徴を的確に読み取り、それらの違いを表にまとめる問題の正答率が高い。(通し番号3)「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では、漢字の読み取りの正答率が高い。(通し番号11~14)「書くこと」では、作文を二段落構成で書くことや、適切な内容となるように書くことの正答率が高いことから、条件に合わせて文章を書く力が定着してきている。(通し番号43、48)

(3) 読解力と正答率の関連について

説明的な文章において、文章中の空欄に当てはまる言葉を選択する問題(通し番号6)の正答率が13.3%と、全設問中で最も低かった。正答である「価値判断」よりも「状況判断」というなじみがある言葉が選択肢にあったことにより、場面に応じた適切な言葉を精査せずに解答したことが考えられる。また、筆者の考えについて、決められた字数で答える問題(通し番号10)では、正答率が25.4%と低かった。文中から筆者の考えの根拠となる部分を読み取り、問われている形式に合わせて答える力に課題がある。

(通し番号6)

に当てはまる言葉を から選んで書きましょう。

・ ・ ・

(通し番号10)

高橋さんは、筆者の考えを、根拠に注目して次のようにまとめました。文中の言葉を使って、後の言葉に続くように、二十字程度で書きましょう。

ので、それぞれのメディアが、どんな意図で、どんな情報を提供しようとしているのかを考える必要がある。

(4) 全国学力・学習状況調査の類題について

正答率は、昨年度の全国の結果と比べ35.6%から43.0%に上がっており、高くなっている。しかしながら、文脈に合わせて同音異義語を漢字で正しく書く問題(通し番号35)の正答率が半分以下であり、その理解と定着を図る必要がある。

(通し番号35) をもつ。

2 今後の授業に向けて

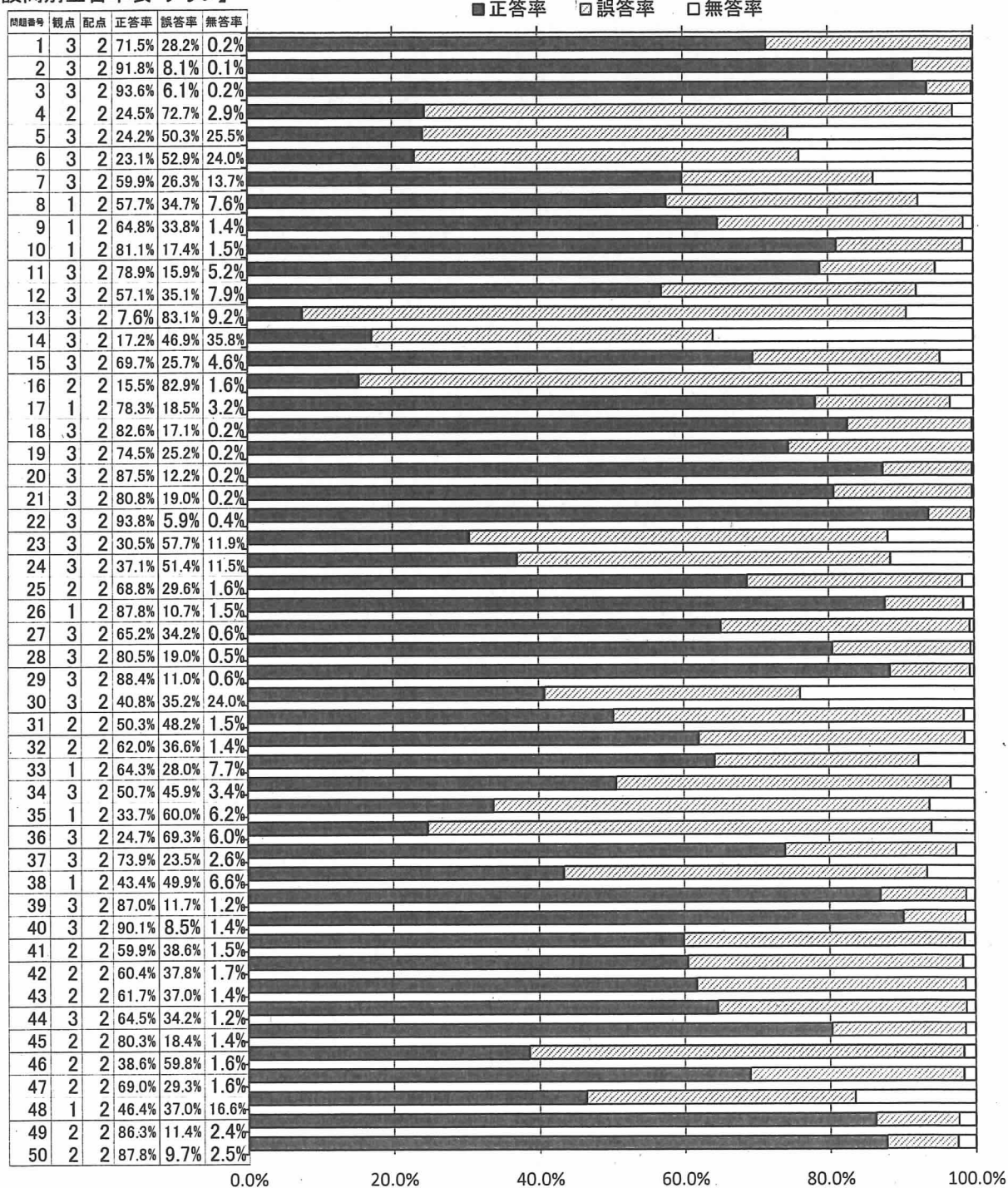
- (1) 場面に応じて適切な言葉を選ぶ力を養うためには、全体の構成や展開を意識しながら読むことを指導し、前後の関係を考えて読むようにすることが必要である。それと同時に、語彙を豊かにすることにも取り組むことが大切であり、国語辞典の活用を習慣づけたり、同義語や類義語、対義語を関連させながら学習したりするなどの工夫が必要である。
- (2) 筆者の考えを読み取り、問われている形式に合わせて答える力をはぐくむためには、説明的な文章を扱う際、筆者の考えやその根拠となる部分に着目しながら読むことを指導したい。また、筆者の考えを字数指定して要約したり、キーワードを使ってまとめたりするなど、書く活動を適宜取り入れることで伝えたいことを明確にして形式に合わせて答える力を養いたい。

社会

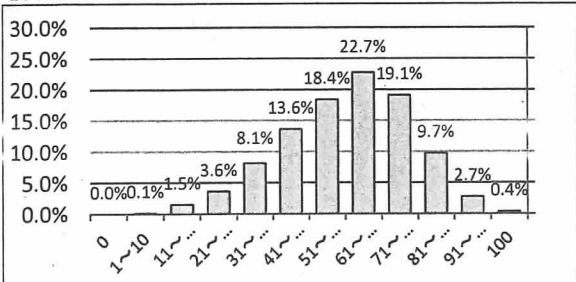
抽出生徒数 801人

抽出平均 61.4点

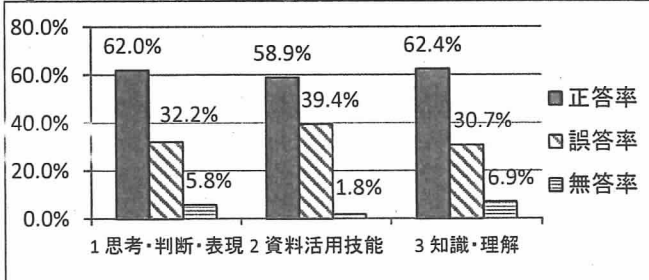
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



1 社会科の考察

(1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は61.4点であり、観点別平均正答率は、「思考・判断・表現」が62.0%（昨年62.2%）「知識・理解」は62.4%（昨年61.2%）と昨年とほぼ変わりなく、「資料活用技能」は58.9%（昨年81.1%）とかなり低くなっている。平均無答率が最も高い観点は「知識・理解」の6.9%であり、他の2観点ともに昨年と変わらない。

(2) 正答率の高い問題について

歴史分野では、各時代を特徴づける歴史的事象や文化、活躍した人物の「知識・理解」を問う問題の正答率は85%を超えている。（通し番号20、22、26、29）

また、グラフから情報を読み取る問題（通し番号49、50）においても正答率が85%を超え、基礎的資料から情報を的確に読み取る力は昨年度同様に定着している。

(3) 読解力と正答率の関連について

資料活用の技能をみる平均正答率は58.9%と低い値を示した。特に、グラフを読み取り、正誤を答える問題の正答率は15.5%（通し番号16）と最も低かった。資料から順位や割合等の社会的事実を的確に読み取る力は定着しているが、社会的事象について複数の資料から必要な情報を関連づけて解釈する技能に課題があると考えられる。

（通し番号16 全正）

【3】(4) 下の【資料1・2・3】を見て、正しいものには○を、まちがっているものには×を書きましょう。

ア 消費量が生産量を上回ったため輸入量が増え続けている。

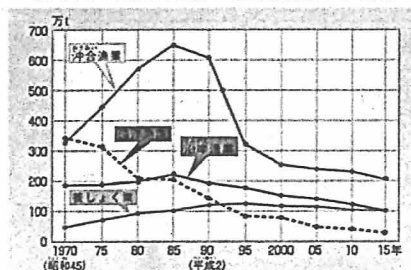
イ 日本の近くの海でもたくさんの魚がとれるようになったので、遠洋漁業を行う必要がなくなった。

ウ 日本の水産物輸入量は、水産業で働く人の数とともに、増えたり減ったりしている。

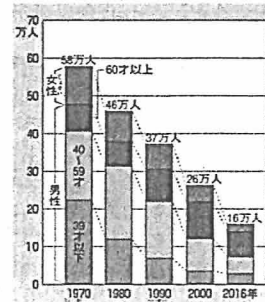
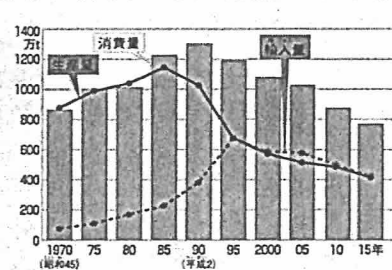
エ 近年、水産業で働く人の高齢化が進んでいる。

【資料3】水産業で働く人の数の変化

【資料1】漁業別の生産量の変化



【資料2】日本の水産物輸入量の変化



（教育同人社 社会科資料集5年）

2 今後の授業に向けて

- 基礎的・基本的な知識の確実な習得においては、どの分野でも、社会的事象の意味を理解し、説明できるようにすることが必要である。そのために、課題意識をもって資料を読み取ることができる発問となるよう工夫し、読み取った情報を多面的にとらえ、自分の考えを見直し、まとめる活動を取り入れることが大切である。
- 資料から必要な情報を関連づけて解釈する技能をはぐくむためには、課題に対して読み取った情報を基に「なぜ、このように変化したのか」「数字は減少しているが割合はどうか」「減少している原因は何か」など、複数の視点からとらえ、その意味を考える活動が必要である。また、複数の視点からとらえた意味を関連づけて考察することも必要である。

数学

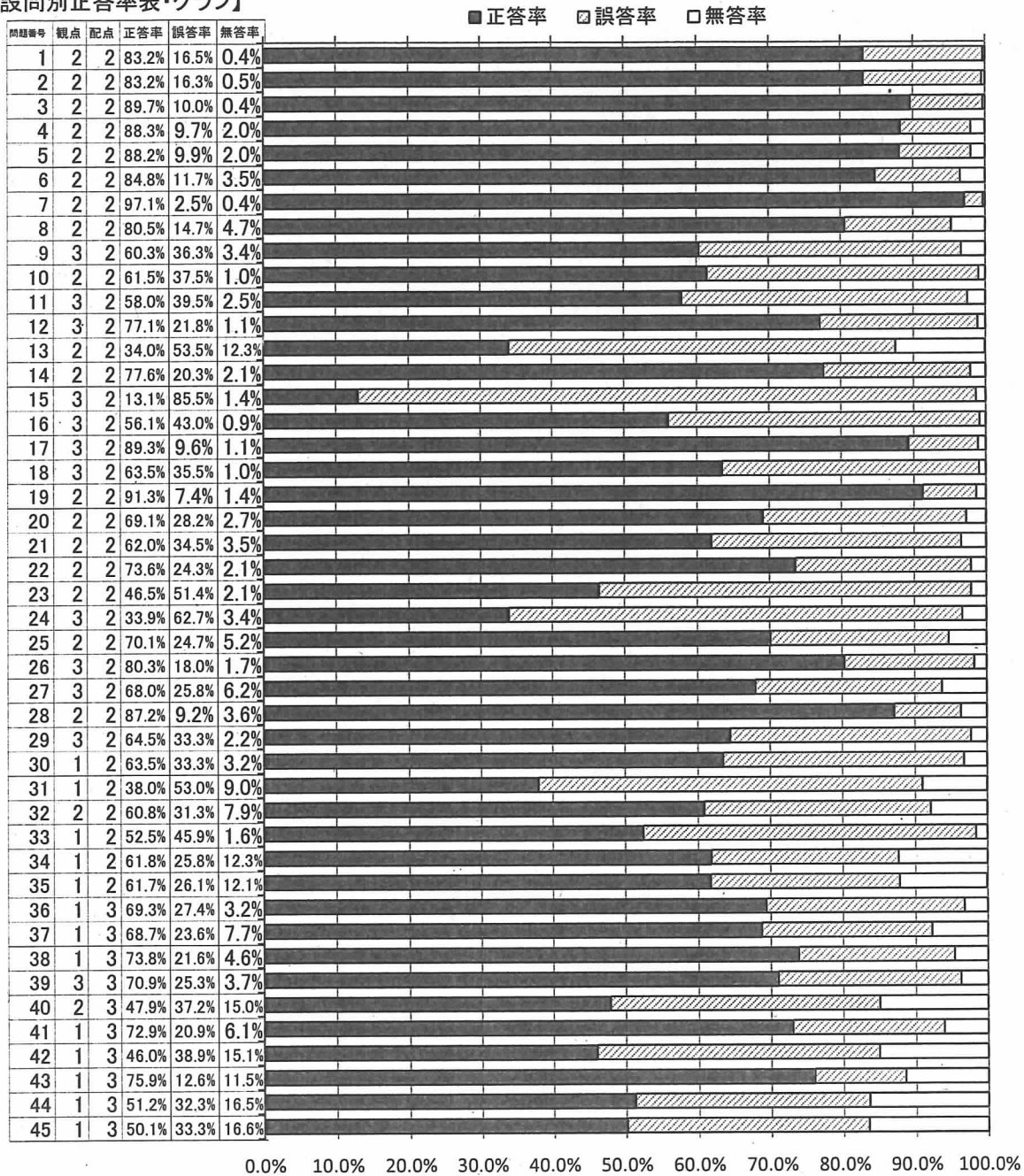
抽出生徒数

801人

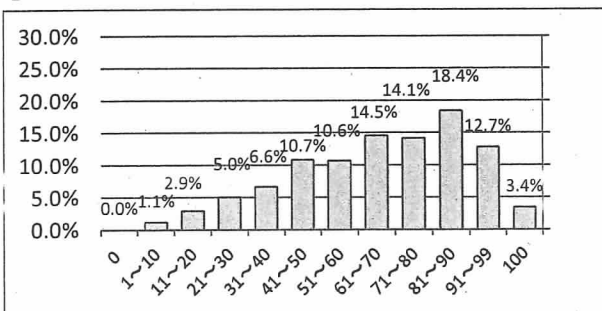
抽出平均

66.2点

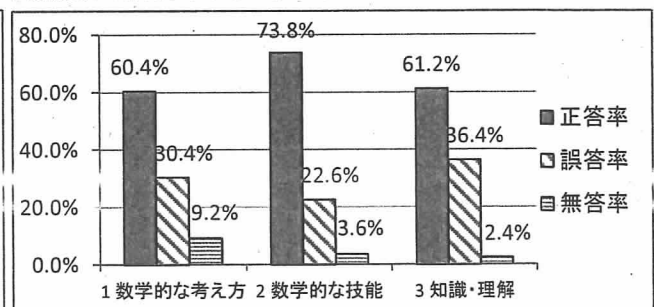
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



1 数学科の考察

(1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は、66.2点であり、昨年度より7.2点高くなっている。観点別では、「数学的な技能」の正答率が73.8%（昨年度63.6%）と昨年度よりかなり高く、「数量や図形などについての知識や理解」の正答率も61.2%（昨年度55.7%）と高くなっている。「数学的な見方や考え方」の正答率は60.4%（昨年度59.7%）にとどまり、無答率は9.2%（昨年度8.3%）と昨年度より高い。

(2) 正答率の高い問題について

小数を相対的に捉える問題（通し番号7）、相似の図形から三角形の辺の長さを求める問題（通し番号19）では、正答率が90%を超えている。また、正答率が88%以上の問題6問中5問が「数学的な技能」の問題であり、基礎的な計算能力は定着していると考えられる。

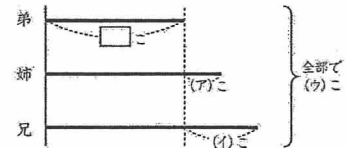
(3) 読解力と正答率の関連について

数直線図を読み取り、式に表す問題（通し番号31）では、正答率が38.0%と4番目に低い。この問題の前問（通し番号30）では、問題文を数直線図に数値を当てはめる問題の正答率は63.5%であった。また、通し番号32の問題では、60.8%の正答率であり、通し番号30と同等の正答率であった。このことから、数直線図から求める数量を導き出すための式を表すことができなかつたことが分かる。結論までの筋道を立てて、途中式も含め適切な式で表現する力に課題があると考えられる。

(通し番号30、31)

[12] 全部で57このラムネを、弟、姉、兄の3人で分けました。姉は弟より4こ多く、兄は弟よりも8こ多くなりました。弟のラムネの数はいくつでしょう。

- (1) 57このラムネを3人で分けたときの様子を、下の図で表しました。(ア)から(ウ)にあてはまる数を書きましょう。
- (2) (1)の図をもとにして、弟のラムネの数を求める式と答えを書きましょう。



(4) 全国学力・学習状況調査の類題について

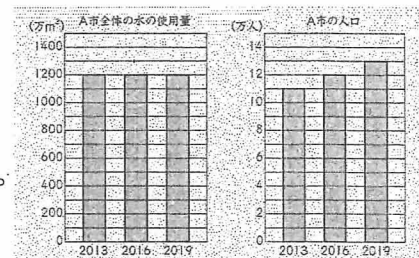
昨年度に正答率が低かった加法と乗法の混合問題（通し番号1）の正答率は、83.2%（小学6年時70.3%）とかなり高くなった。一方、グラフからその特徴を読み取り、数量の大小を判断する問題（通し番号33）の正答率は、52.5%（小学6年時57.0%）とやや低くなっている。文章を評価する際に、グラフから読み取った情報を目的に結びつける解釈ができなかつたことが原因だと考えられる。

(通し番号1) $6 + 0.5 \times 2$

(通し番号33)

A市全体の水の使用量を示すグラフとA市の人口を示すグラフを見ると、2013年から2019年までの一人あたりの水の使用量について分かることがあります。どのようなことが分かるか、下の㉠から㉤の中から1つ選びましょう。

- ㉠一人あたりの水の使用量は減っている。
- ㉡一人あたりの水の使用量は変わらない。
- ㉢一人あたりの水の使用量は増えている。
- ㉣一人あたりの水の使用量は、増えたり、減ったりしている。



2 今後の授業に向けて

- (1) 結論まで筋道を立てて適切な式で表現する力を養うには、課題を明確にとらえ、自分の考えを式や言葉で論理的に表現する活動が大切になる。また、考えの妥当性を振り返ることを促すためには、グループ活動などの発表の場を設定して他者と考えを交流させることが効果的である。
- (2) グラフを目的に応じて理解し解釈する能力を高めるためには、目的を正しく理解して、それぞれのグラフから読み取ることができる情報が何であるかを理解することが必要である。その上で、得られた情報と目的の関係を整理する習慣をつけることが情報を正しく解釈する力の育成に繋がる。

理科

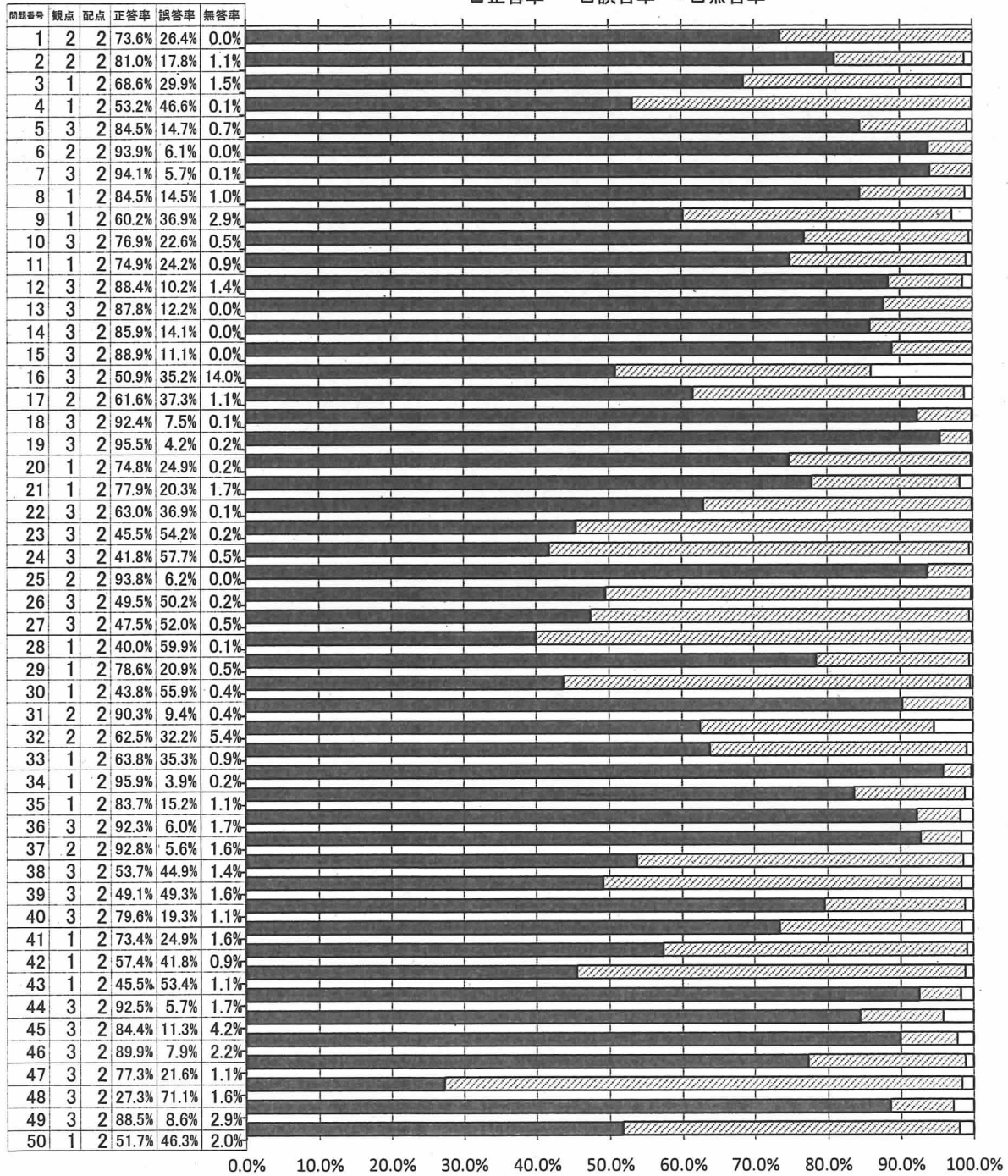
抽出生徒数

801人

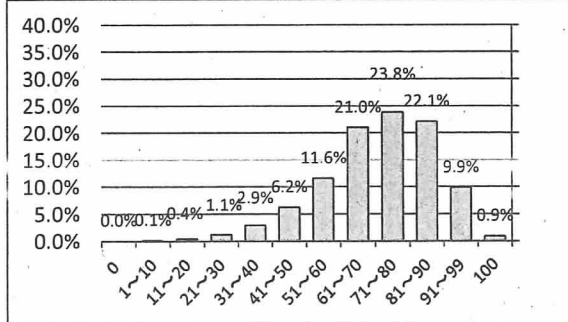
抽出平均

72.1点

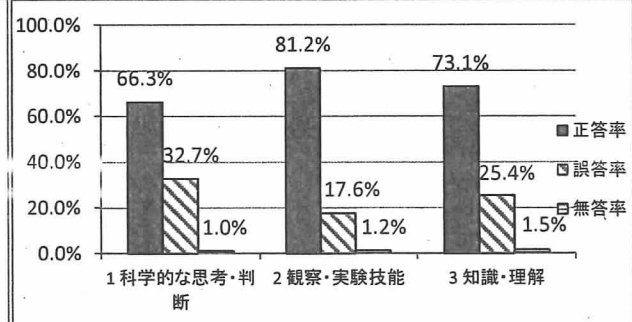
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



1 理科の考察

(1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は72.1点であり、昨年度より約5点低くなっている。観点別では、「科学的な思考・判断」の正答率が66.3%（昨年71.6%）、「観察・実験の技能」81.2%（昨年82.9%）、「自然現象についての知識・理解」73.1%（昨年79.9%）と、いずれも昨年度よりも低下している。また、知識・理解の正答率は単元によりばらつきが大きく、基礎的・基本的な知識の定着に課題がある。

(2) 正答率の高い問題について

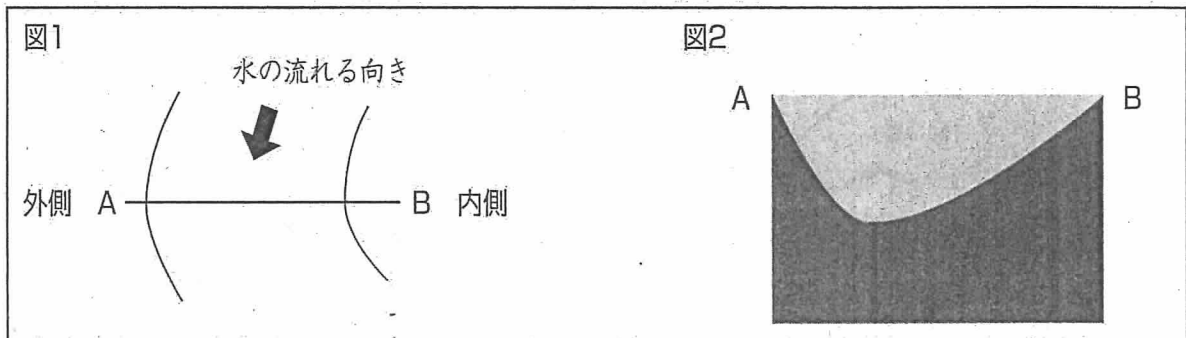
観察・実験の技能をみる問題（通し番号6、25、31、37）は90%以上の正答率である。また、知識・理解をみる問題の中でも、観察・実験の結果を問う問題（通し番号7、18、19、36）は90%以上の正答率である。見通しをもって観察や実験を行い、自然の事物・現象を正しくとらえることを通して、基礎的・基本的な知識や技能を身につけていると考えられる。

(3) 読解力と正答率との関連について

流れる水の働きによってつくられた川底の形について、「なぜこのような形になるのか」という理由を記述する問題の正答率は60.2%であった。この問題では、まず、「このような形」がどのような形なのかを図からとらえる必要がある。2つの図を関連させながらカーブの外側が削られ深くなっていることの読み取りに加え、流れる水には、土地を浸食したり、石や土を運搬したり堆積させたりする働きがあることへの理解が重要である。また、それらの知識を実際の河川における事象とつないで考える必要がある。さらに、カーブの外側の浸食が大きいことや流れる水の速さや水量が多いということ等の実験を通して得た知識を組み合わせ、川底の形について思考し、説明する力が求められる。

通し番号（9）

(2) 図1は川が曲がって流れているようすを表したものです。図1のAとBを結んだところの川底の形は図2のようになっていました。なぜこのような形になるのか理由を書きましょう。



2 今後の授業に向けて

- (1) 基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得するためには、現象を十分に観察したり体験的にとらえたりする場を充実させることが大切である。さらに、日常生活での経験を獲得した知識と関連させて説明したり、知識を日常生活に当てはめて活用したりする場を設けることで、自然の事物・現象と学んだ知識が結びつき、知識や技能が定着しやすい。
- (2) 知識を組み合わせ、思考し、説明する力を高めるためには、明確な課題意識をもち、見通しをもって観察、実験を行うことに加え、結果を整理し、考察、結論へとつなぐ学習を積み重ねることが大切である。実験の結果を整理する際には、算数科の学習と関連させて、表やグラフを用いたり平均を求めたりするなどして、適切に処理できるようにする。考察する際には、図、絵、文を使ったレポートを例示したり、獲得した知識や用語を用いてグループで考えを交流させたりすることが説明する力の定着に繋がると考える。